

(10) 附属幼稚園

ア 設置の趣旨（目的）及び組織

i) 本園の任務

- a 教育基本法、学校教育法等に基づき幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長するとともに、保育に関する研究を行う。
- b 学部学生及び大学院学生の実地教育、実地研究に協力し指導に当たる。
- c 大学及び附属小・中学校と連携し、教育理論及び実践に関する研究を行う。
- d 地域社会における幼児教育の振興に寄与する。

ii) 組織

附属幼稚園は、園長、副園長、教諭3人、養護教諭、非常勤講師2人、教育補佐員（特別教育支援員）、教育補佐員、事務職員2人、保育支援員（預かり保育担当）3人により構成される。

iii) 教育目標

「元気な子ども やさしい子ども 考える子ども」

イ 運営・活動の状況

i) 教育研究・管理運営の状況

a 教育課程改善研究の推進

平成25～27年度の「遊び込む子ども一学びの基盤に着目して一」をテーマとした研究を終え、平成28年度から新たなテーマで3年計画の研究を開始した。今年度は、研究3年目に当たる。

1) 研究主題

「遊び込む子ども一教育課程の創造一」（3／3年次）

2) 研究目的と内容

平成25～27年度の前研究では、幼児教育に携わる者にとって馴染みのある「遊び込む」という言葉に関し、子どものその姿について深く掘り下げた。1年目は、保育者が幼児の遊ぶ姿に何を見出したときに「遊び込んでいる」と感じるのか、イメージや感覚のレベルを超えて「遊び込む」姿を捉え、2年目は、遊び込むための環境や教師の援助を探り、3年目は、遊び込んだ子どもの育ちを探った。

平成28年度からは、平成27年度までの研究の総括として3年間の計画で、遊び込む子どもの姿を手がかりとしながら従来の教育過程を見直し、再編成することに取り組んだ。昨年度は、教育活動の項目のうち、平成28年度の「遊び」に引き続き、「みんなでかかわる活動」「生活行動」の内容や教師の援助について、これまでの内容を整理し見直しをした。また、従来の3つの活動名や3つに分類するための観点、教育時間の表現方法について検討を重ね、活動名を「あそび」「みんな」「せいかつ」と変更し、観点等も修正した。今年度は昨年度に整理した教育課程および年間指導計画の有効性を検証し、新しい教育課程と年間指導計画にまとめ全国に発信した。

3) 平成30年度幼児教育研究会の開催（第26回幼児教育研究会 10月10日）

幼稚園・保育園に加え小学校や教育行政関係機関からも大勢の参加者があり、総勢287人の参加が得られた。今年度の特徴じゃ、幼児教育関係者や県外からの割合が高かったことである。

午前中の公開保育では、保育室、遊戯室、出会いの広場などの屋内空間と、園庭や園舎周りの

屋外空間の様々な場所で、仲間とかかわり、主体的に遊ぶ幼児の姿を公開した。参会者からは遊びに集中する幼児の姿や、幼児の自主性を引き出す教師の援助について高い評価を得た。研究会参加者から得たアンケートには、「子どもたちのことを思っている環境構成がなされていた」「教師の子どもへの関わりが一人ひとりのことを分かっていることであった」「落ち着いた雰囲気の中で、自由に工夫しながら遊ぶ子どもの姿が印象的だった」「子どもたちの姿はもちろん、先生方の姿から学ぶことがとても多く、自分の保育を見つめ直してみようと思った」「活動時間や指導計画が分かりやすい、真似したい、共感できる考え方がたくさんある、研究の方向性がよい、この教育課程を活用したい、自園に取り入れたい」などの好評価を得た。

分科会では、3、4、5歳クラスそれぞれの保育の様子や教師の援助、保育環境等について、幼稚園教諭、小学校教諭、保育士、行政関係者、研究者等、各々の立場から意見交換を行うことができた。

午後は、会場を大学講堂に移し、お茶の水女子大学文教育学部人間社会科学科教授であり、お茶の水女子大学こども園園長宮里暁美氏から『『やりたい!』が発揮される保育環境～主体的・対話的で深い学びへと誘う～』と題して講演をいただいた。参会者からは、「午前午後で場所を変えたことは良かった」「大変興味深く触発される講演内容だった」「子どもたちの小さな気づきをのがさずに気づける教育者になりたいと思う」「自分の保育観に大きな刺激を受けた、これまで思っていたことが確信になった、子どもを尊厳あるものとしてとらえることの大切さを改めて実感した。敬意をもって子どもたちを見つめていきたい」など、多くの感想を得た。

4) 研究紀要の刊行

3月に平成30年度研究紀要『遊び込む子ども—教育課程の創造—vol. 3』と「教育課程及び年間指導計画」を刊行した。本園のフェイスブックやホームページに掲載したところ、すぐに全国から問い合わせがあった。新幼稚園教育要領の完全実施の年であることや幼児教育が注目されている社会情勢等の影響を受け、本園の実践を参考にしようとする様子が見える。

b 管理運営の状況

1) 教職員や保護者等による学校評価を生かした学校運営改善の取組

年度始めにランドデザインを作成し、全保護者に配布するとともに、「ふぞくフォーラム（5月）」に園運営について保護者向けに説明をした。1月には保護者と教職員による学校評価を行った。学校評議員会を平成30年5月21日及び平成31年2月27日に開催した。保育や研究の成果及び学校評価の結果を示し、協議を行うとともに、園の活性化のために重点的に取り組んできていることについてご意見をいただいた。いずれについても好評価をいただき、今後の取組については様々な角度からご示唆いただいた。評議員の意見を次年度の改善に反映させたい。

2) 教育環境の整備と安全管理の徹底

幼児の豊かな体験の場として充実した環境となるように、見通しをもち、計画的、継続的に整備を行っている。今年度は園庭及びその周辺の老木や危険性のある樹木を伐採した。園舎裏の採光状態がよくなり、幼児の新しい遊び場となった。また、遊びに使ったり食べたりできる樹木や香りのする樹木などを新たに植樹した。

園庭及び園舎内に設置されている遊具の安全基準に沿った総点検を専門業者に依頼して実施した。園庭にある滑り台については安全基準に沿わない部分があったため修繕したが、それ以外は安全基準をクリアしていた。

夏から秋にかけて、緑の小道でイノシシやクマが目撃され、普段は遊びに活用している森を、

今年度は有効活用することができなかった。

本学附属三校園の用務員が週1回来園し環境整備を行った。本学学生のボランティアによる園庭の整備も充実した。また、保護者ボランティアによる春と秋の年2回の環境整備作業は幼児の遊びの充実のためには欠かせない行事として協力を依頼している。砂場の砂や土山の土は年度末に入れ替えたり補充したりした。

3) 安全確保の取組

警察や消防署の協力を得て、火災、地震、不審者侵入等を想定した避難訓練を年6回実施した。特に東日本大震災の教訓を踏まえ、地震の震度に合わせた対応などを徹底し、訓練を実施した。防災に関し、保護者向け緊急連絡メール配信システムを継続するとともに、地震に関する申し合わせを保護者に徹底した。また、保育環境の安全確保に向けた、環境整備日・安全点検日は毎週定期的に設けている。さらに、PTA交通安全委員が上越市から講師を招いて、幼児や保護者に防犯や交通安全の重要性を訴える会を開催し、安全への意識を高めた。幼児の実態に合った内容にしていくなどの課題が残った。

4) 本園の魅力に関する調査結果に基づいた積極的なPR活動等

保護者アンケートにおいて、ほとんどの保護者が教育の質のよさに満足している結果を踏まえ、教育のよさをパンフレット配布や園開放デーの実施、地元新聞による行事等の掲載により、積極的なPRに努めた。また、年間を通じて園のホームページとフェイスブックにより、随時、幼児の様子や園の様子を発信した。園庭開放は、前年に引き続き毎週1回開催し、年間を通して実施した。次年度は保護者ボランティアによるチラシ配布やホームページの充実などさらにPRに努める予定である。

ii) 附属幼稚園の活性化・充実のための取組

a 保育の充実を図る取組の推進

- 1) 毎日の終礼時における情報交換、幼児の遊んだ跡の様子を見ながら話し合う「保育を語る会」や研究推進委員会を通して、保育改善や研修に継続的に取り組んだ。
- 2) 幼児教育コース教員を主とした大学教員など園外指導者の協力を得ながら専門的な見地を生かした研究や研修を進め、幼児の学びを見とる力や実践的指導力の向上を図った。
- 3) 幼児の学びや育ちについて履歴を集積し、保育や指導計画の改善に生かした。

b 家庭との連携を深める取組の推進

- 1) 登降園時や連絡帳等を活用した情報交換をはじめ、各種たより等を通して保護者との連絡を密にした。
- 2) 保育参観日と教育相談日を毎月1回実施。運動会や祖父母参観等の園行事には遠方の親族も多く参加され、幼稚園への理解を深める機会となった。
- 3) 年2回の「ふぞくフォーラム」（保護者対象）を実施し、幼児教育の重要性や園運営について理解を図ることができた。第1回は、園長が幼稚園の歴史について語り、幼児教育の変遷について情報共有することができた。

2回目は、本学教室を会場に、本学の加藤哲文先生を講師として『親子コミュニケーションから学ぶ「子どもの育て方」「親の育ち方』』と題し、講演をいただいた。講演では、上越市における親子コミュニケーション支援の取組や、ほめることの大切さや効果的なほめ方などについてお話しいただいた。参加者からは、「とても参考になった」「参加できなかった方にも知らせたい」など、好評価を得た。現保護者のライフスタイルに合わせたPTA活動にするため、PTA役員

を中心に模索し、必要に応じてアンケートをとったり、協議したり、臨時保護者会を開催して説明するなど、即実践の改革を実行した。

c 大学・附属校との連携・協力の推進

- 1) 附属小学校1年生と幼児の交流活動を年間を通して4回行った。小学校への接続が円滑に行われるよう、双方向性のある活動展開を工夫したが、来年度は担任同士の入念な打ち合わせによってより充実した内容としたい。
- 2) 学部1年生の教育実習と学部4年生等の幼稚園専修教育実習を受け入れた。
- 3) 幼児教育コース教員と協議会を行い、研究や運営等の課題について協議した。
- 4) 大学教員や英語教育専攻の学部生・院生の協力を得て、年長児と年中児を対象とした英語活動を毎月実施した。
- 5) 特別支援教育コース並びに同実践研究センターと連携し、幼児の発達相談環境を整えた。入園選考時にも適切なアドバイスを受けることができた。さらには、特別支援教育コースと連携を図り、支援の必要な幼児とその保護者に適切な援助や継続的な指導を実施できた。
- 6) 学部生・院生のボランティアによる保育援助、環境整備の体制が充実した。また、学生のサークル活動を幼児のお楽しみや祖父母参観日の余興として活用し、幼児と学生の双方にとって価値ある体験となった。学生のOJTに直結した。

d 近隣の幼稚園・保育所、教育委員会との連携

- 1) 上越市学校教育研究会幼稚園部会及び生活科部会の部員に本園の研究会の講演を公開した。
- 2) 妙高市の公立こども園の幼小接続に関する園内研修の講師を務めた。
- 3) 佐渡市教育委員会の要請により、佐渡市内の幼稚園教諭、保育士、小学校教諭の研修会の講師を務めた。

ウ 優れた点及び今後の検討課題等

i) 教育研究・管理運営の状況の視点から

a 教育実習の受入れについて

附属園として質の高い教育実習指導を行うことができ、今年度の反省点をもとに改善に努める。

b 大学教員との共同研究等の推進について

幼児の見取りや研修方法等に関する評価や特別支援教育等についての実践的研究を推進する。

ii) 附属幼稚園の定員充足等の視点から

a 園の積極的なPR活動等

附属三校園のパンフレット作成・配布に合わせフェイスブックやホームページ等により、当園の質の高い教育について積極的にPRする。年間を通じた園開放と園庭開放の際に、園の魅力を発信するとともに、入園志願者数の増加につながる働きかけを工夫する。

b 教育相談の充実

幼児の困り感や保護者の子育てに対する不安に応じる教育相談の充実に努め、保護者が安心して預けられる保育の充実に一層の力を入れる。

c 預かり保育の充実

これまで以上に活用しやすい預かり保育にするため、保育料金の細分化や保険加入制度の見直しを図った。全国の附属幼稚園の参考となるような教育課程や年間指導計画の作成に向けても取り組む。